



TITLE:

行為の「質」について

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. 行為の「質」について. ことばの構造とことばの論理: 山口巖教授停年記念論文集 1998: 272-286

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65820>

RIGHT:

行為の「質」について¹

§1 これまで折に触れて、行為の「質」について言及してきたが²、この概念についての統一的な取扱い、未だ行っていない。しかし今後の行論の推移を考えれば、この概念はなかなか便利なものであると思われる。この辺りでこの概念について体系的な考察を行おうと思うに至った所以である。

動詞の意義に関するこれまでの考察において、「行為の認定」に要する時間 Δt を考え、これが動詞によってさまざまな大きさをとり得ると考えて来た。加えてこの Δt の大きさが、語彙的意義のレベルにおいて「体」の範疇と密接に関連しているであろうことも、同時に示唆した³。

これらの議論の詳細については、夫々の文献についてみられることを、期待する外はない。

§2 さてここで導入しようとする「行為の質」の概念は、大まかにいって三種に分たれる。「状態」、「過程」、ならびに「事件」の質である。

もとより言語は一の continuum であるからして、これらの質が決して相互に截然と区別される discrete な概念であり得ぬことは、むしろ当然であろう。しかしこの連続性が「言語は一の continuum である」という、普遍的でいわばア・プリオリな命題から演繹されるが如きものであり得ぬことも、行為の質を上述の「行為の認定の時間」と関連づけることによって、一層明白なものとなるであろう。

すなわち Δt が最も小であると見做されうような意義をもつ動詞を以て「事件」の質をもつものと見做し、 Δt が漸次増大するにつれて、「過程」および「状態」の質に移行すると考えるのである。従ってこれは恰かもスペクトルの各部分にそれぞれ特定の名辞を充当する作業にも似ている。決して discrete なものではあり得ないのである。

しかもこれらの質の区別には、「客観的」なものの外に、主観的なレベルにかかわる要素も、多分に介入せざるを得ないと考えられる。

たとえば「過程」の質はその典型的な場合においては、これを図1のように示すことを得ると考えられる。しかしこの Δt も、観方によれば、殆んど時間的な幅をもたないとする考え方も、また可能である。ツルゲネフの散文詩を引用するまでもなく、たとえ数千年

¹『人文』第26集 昭和55(1980)年3月 92-115頁。

²「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第8号(1976), p. 11, 註2; 「状態動詞について」『古代ロシア研究』第12号(1978), p. 57.

³「状態動詞について」 p. 61.

の歳月と雖も、永劫からすれば須臾にしか過ぎないであろう。すなわち図 2 である。これは「事件」の質をあらわすものに外ならない。因みに「状態」の質を同じく図示すれば、図 3 のようになると考えられる。

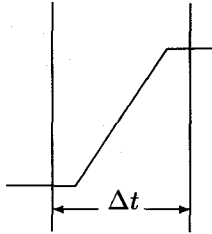


図 1 過程

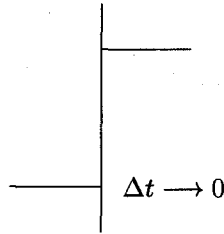


図 2 事件

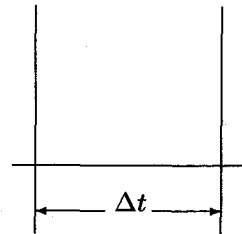


図 3 状態

§3 ところで「状態」の質については、既に考察したように⁴、「絶対的定常性」を示す「本来の状態動詞」と並んで、「相対的定常性」を表わす「非本来の状態動詞」もこれに属している。

前者に属するものは、たとえば *сѣдѣть* 「坐している」、*стоѣти* 「立っている」のような動詞であり、後者に属するのはたとえば *вьртѣти* 「まわっている」、*шоумѣти* 「ざわめく」のようなものである。

これは次のように図式化された。すなわち

$$V(\text{itr. stat. nps.}) : [dS_x, (\text{Rep.}(dS_x)) \cdot K]$$

$$V(\text{tr. stat. nps.}) : [dS_x, dS_y, (\text{Rep.}(R(dS_x, dS_y))) \cdot K]^5$$

ここで stat. nps. は「非本来の状態動詞」*stativa non per se* であり、 dS_x 、 dS_y はそれぞれ X あるいは Y の状態の変化をあらわす。また Rep. は反復を、 $R(x, y)$ は x と y とのあいだに一定の関係の存在していることをあらわしている。 K は付加的条件の集合である。

このような結論に到達したのは、印欧語における状態をあらわす接尾辞 **-ē-* の構成にかかる動詞を考察した結果であった。しかし同時にこのような意義をもつものが、この接尾辞をもって構成される動詞に限られるものでないことも、指摘しておいた。むしろ接尾辞 **-ē-* の構成をもって相対的定常性をあらわす動詞は、スラヴ語においても数において限定され、相対的にはスラヴ語の古層に属するということができる。

⁴ *op. cit.*, pp. 60–61.

⁵ これまでは印刷の都合もあって付加的条件の集合 K の中に含まれているものをとり出して明記する場合、たとえば $(S_x \rightarrow P) \cup K$ のように表示していた。しかし、これは合併の記号 \cup とまぎらわしく、誤解を招くおそれがある。 $(S_x \rightarrow P)$ と K との関係は、むしろ both...and の関係であるから、 \cap とすべきであろう。しかしこれも表記に不便であるから $(S_x \rightarrow P) \cdot K$ のようにすることにした。

これに対して後代のスラヴ語では、たとえば *вълновати* 「波立つ」、*възрывать* 「爆発する」、*падати* 「落ちる」のように、いわゆる多回体接尾辞 *-а-*、*-ова-*、*-ева-*、*-ыва-*、等による語構成が発達しており、相対的定常性は専らこの接尾辞によってあらわされているのが、実状である。

§4 ここで行為の三つの質、すなわち「事件」event、「過程」process、「状態」state を (*S* の多用を避けるために) 夫々 *E*、*Π*、*Σ* によってあらわすことにする。

възрывать のようなタイプの動詞があらわすところのものは、明らかに *възрыти* 「爆発する」という行為が繰り返されることによって現出される相対的定常状態に外ならない。これはたとえば上述の図式

$$V(\text{itr. stat. nps.}) : [dS_x, (\text{Rep.}(dS_x)) \cdot K]$$

において dS_x と $\text{Rep.}(dS_x)$ が条件 K を共有していることによって、論理的にも説明することができる。

このような相対的定常性を Σ_1 として、絶対的定常性 Σ_0 から区別することにすれば、 Σ_1 は $\Sigma_1 = \{E_i | i \in N\}$ として表示することができよう。

これに対し同じく相対的な定常性をあらわすもののうちにも *вълновати* 「波打つ」、*жевати* 「咀嚼する」などのように、少数ではあるが、*пищати* 「ピーピー鳴く」、*трещати* 「パチパチ音をたてる」、あるいは *кысѣти* 「発酵する」、*шоумѣти* 「ざわめく」の類と共に、 Σ_0 に所属せしめるべきものもある。

思うにこの違いは、名詞の数の場合と同じく、個々の「行為」の有する個別性の強弱にあると考えられる。

もし「行為」の個別性が極めて微弱であって、命名がこれら個々の「行為」の集合に対してなされるならば、この「行為」の集合は、 Σ_0 に属せしめられるべきものとなるであろう。たとえば *вълновати* 「波立つ」である。これは名詞におけるたとえば *песок* 「砂」に比することができる。この場合命名は個々の砂粒に対して与えられていない。砂粒の集合体に対してなされているのである⁶。このような対象の個別性の強弱に対する判定の基準は言語によって必しも一定してはいないし、また同一の一言語の裡にあっても、必しも常に分明であるとは限っていない。しかし大よそのところは、当該言語の所有者の集団的認識によって定まるということができよう。

これに対して「行為」の個別性が充分に高く、従って命名が個々の「行為」に対してなされるが、これが多数になるに及んで集合として意識され、これに対して別個の命名がなされるような場合には、これは Σ_1 に属せしめるべきものとなるに違いない。名詞で言えば集合名詞である⁷。

⁶ 「ロシア語における数のカテゴリーについて」『古代ロシア研究』第9号(1968), p. 133.

⁷ *op. cit.*, pp. 124–125.

§5 一方 Σ_0 に属すべき意義をもつもののうち、集合を構成する個々の要素の個性がなお比較的高いと考えられるものについては、この集合から一つの要素を取り出すことは可能であると考えられる。いわゆる一回体動詞 *verba semelfactiva* と称される一群の動詞の構成に使用される接尾辞 *-ну-* の機能は、まさにこのような要素の抽出にあったと考えられる。たとえば *мелькать* 「きらきらする」に対する *мелькнуть* 「きらりと光る、ひらめく」、*толкать* 「つつく」に対する *толкнуть* 「ひとつきする」の如くである。

したがって接尾辞 *-ну-* の機能は、名詞の場合における接尾辞 *-ин-* の機能に擬することができる。接尾辞 *-ин-* が、本来、集合に対して与えられた名辞に附加されて、この集合の成員たる個物をこの集合から抽出することを以ってその機能としているからである。これが *suffixus singulativus* と称される所以である。

たとえば *англичанин* 「イギリス人」、*крестьянин* 「農民」は、複数において語幹から接尾辞 *-ин-* を失い、*англичан-е*、*крестьян-е* などとなるが、これとても、複数においては、集合からその要素を取り出す手続きを、最早や必要としないという所に、その理由が存していると考えられるのである⁸。

しかし一方これらの名詞は、爾余の集合名詞が単数として意識されているのに対し、複数として機能している。これはこの種の名詞によって指示せられる集合の成員の個性が、相対的に高いと意識されていることによるものと思われる。

このように *semelfactiva* を作りうるほどに個性の高い「行為」の集合に対して与えられる動詞を、慣用に従って反復動詞 *iterativa* と称することにする。

§6 ところで状態をあらわす動詞は、これで尽された訳ではない。過程及び絶対的定常性をあらわすものの集合もまた、状態として観念せられうるであろう。これを Σ_2 および Σ_3 とすることにすれば、 $\Sigma_2 = \{\Pi_i | i \in N\}$ 、 $\Sigma_3 = \{\Sigma_{0i} | i \in N\}$ としてあらわせよう。

ロシア文法ではこれらを一括して「多回体動詞」*многократные глаголы* と称している。前者に属するものとしては、たとえば *читывать* 「屢々読む」、*говарывать* 「屢々話す」のようなものがあり、後者に属するものには、たとえば *сизживать* 「屢々坐っている」、*лёживать* 「屢々横わっている」などがある。

これらの動詞は現代では既に稀用であり、またその使用も極めて限定されている。例外的に頻度の高いものは、*быть* から派生する *бывать* である。この種の動詞が何故廃用の道を辿るに至ったかは、別途に考察の要があろう。多回体動詞に対する術語は未だ存在しないようであるから、ここでは仮に *verba saepefactiva* と称することにしたい。

§7 状態をあらわす動詞に対して、過程をあらわすものはさまざまであって、必しもこれを明確に類別することは、容易でないと考えられる。

⁸ *op. cit.*, pp. 133-134.

状態をあらわすとされる印欧語の接尾辞 $*\bar{e}$ - についてみれば、これはいわゆる「相対的定常性」をあらわす外に、過程をあらわす場合にも使用されていたことが判明する。たとえば $*reudh-$ (cf. gr. ἔρυθρός, lat. rufus 「赤い」) から派生した $*rudh\bar{e}\text{-}t\bar{e}i-$ > рѣдѣти(ся) は、「赤い状態である」という意義と並んで、「赤くなる」の意味にも用いられた。 $*bh\bar{e}l\bar{e}\text{-}t\bar{e}i$ > бѣлѣти(ся) 「白くある」、「白くなる」のような場合も、これと同然である。

この構成にかかる動詞は、いわゆる使役動詞 *causativa* の接尾辞 $*\text{-}ye/i\text{-}$ による бѣлѣтиなどと平行して、スラヴ諸語では一つの意味的グループを構成している(予想される *causativa* の $*\text{роудити}$ < $*roud\bar{h}\text{-}i\text{-}t\bar{e}i$ は伝存していない。これはおそらく рѣдѣти が稀用に属する動詞となり、краснѣти 等の動詞によって置換されたことと、関連するものと思われる)。

この種の動詞の意義に対応するものとして、たとえばラテン語においては、 $\bar{e}sc\bar{o}$ に終るいわゆる *inchoativa* が存在する。これは状態をあらわす接尾辞 $*\bar{e}$ - に更に接尾辞 $*\text{-}ske/o\text{-}$ が付加されて成ったものである。たとえば, $cal\text{-}d\text{-}us$ 「暑い」 – $cale\bar{o}$ 「暑い状態である」 – $calesc\bar{o}$ 「暑くなる」、あるいは $ruber$ 「赤い」 – $rube\bar{o}$ 「赤い状態である」 – $rubesc\bar{o}$ 「赤くなる」の如くである。これを要するにラテン語においては、接尾辞 $*\bar{e}$ - に更に $*\text{-}ske/o\text{-}$ を附加することによって、二次的に「状態の変化」を「状態ならびに状態の変化」から区別したと考えられるのである。

このような例からみても、「状態」の観念と「過程」の観念は、少くともその周縁的な部分においては、必しも明確に区別されていた訳ではないことが知られる。

§8 これらの *inchoativa* の意義は、「不完全自動詞」の意義

$$V(\textit{itr. incom.}) : [dS_x, P, (S_x \rightarrow P) \cdot K]$$

において、変数 P に定数 p を代入したものと考えることができる⁹。この際には P に当る状態は、最早や表示することを要しないであろう。語根によって既に示されているからである。

このことから *inchoativa* の意義は、次のようなものになると推測される。即ち、

$$V(\textit{itr. inch.}) : [dS_x, (S_x \rightarrow p) \cdot K]$$

またこれに対応する *causativa* の意義についても、次のように考えることができる。

$$V(\textit{caus.}) : [dS_x, dS_y, (S_y \rightarrow q) \cdot K]$$

⁹この定数に当るものは、いうまでもなく語根(たとえば $*reudh-$ 「赤」)によってあらわされる概念である。このような代入の手續きについては、もっと一般的に考えてみる必要があるが、ここではこの問題には立入ることをしない。

これは「不完全他動詞」の意義

$$V(tr. incom.): [dS_x, dS_y, Q, (S_y \rightarrow Q) \cdot K]$$

の Q に定数 q を代入し、 Q の表示を省いたものに外ならない。したがってこの種の *causativa* は実は「他動詞の *inchoativa*」に外ならないことがわかる。したがって、これはむしろ $V(tr. inch.)$ と表示した方がよい。すなわち、

$$V(tr. inch.): [dS_x, dS_y, (S_y \rightarrow q) \cdot K]$$

である。

序に *бъдѣти* 「目覚めている」、*rubeō* 「赤い状態である」のタイプの動詞について考えてみれば、これは状態動詞であるに違いない。ところで状態動詞の意義は、自動詞の場合

$$V(itr. stat.): [S_x, (S_{x(t_0)} = S_{x(t_1)}) \cdot K]$$

であった。ここで $S_{x(t_0)}$ 、 $S_{x(t_1)}$ はそれぞれ時点 t_0 、 t_1 における対象 x の状態をあらわしている¹⁰。しかしこれだけの条件では動詞の語根によってあらわされているはずの状態が表示されない。この状態は動詞ごとに特定されているから、これを p であらわすことにすれば、この種の動詞の意義は、次のようにあらわすことができるかと思われる。すなわち、

$$V(itr. stat. const.): [S_x, S_{x(t_0)} = (S_{x(t_1)} = p) \cdot K]$$

ここで *itr. stat. const.* は、この種の動詞に対して仮に命名したものであって、*intransitiva stativa constantia* を略したものである。「定常状態自動詞」とでもいうべきか。

§9 ここで「運動の動詞」*verba movendi* について考えてみることにしたい。これについては拙稿「状態動詞について」において若干触れるところがあった。ここでその一部を引用すれば、次の如くである。

文法書を播けば通常定動詞が「一定方向の運動」をあらわすのに対して、不定動詞は「不定方向の運動」を示すとされる。しかし一考すれば直ちに明らかになるように「同時に不定方向に行われる運動」などは存在しない。一定方向に飛ぶものが、やがて方向を変え、更にまた方向を変えするという運動形態をとることが確認されてはじめて「不定方向の運動」なる概念の成立をみるのである¹¹。

運動の動詞は何れもその語構成の様式において一定していない。しかしいわゆる定動詞は過程をあらわすものと考えられる。したがって上に引用した議論から、不定動詞は

¹⁰ 「状態動詞について」p. 59.

¹¹ *op. cit.*, p. 62; 「運動の動詞について」『ロシア語学ロシア文学研究』第11号(1979), pp. 101-112.

一応 $\Sigma_2 (= \{\Pi_i | i \in N\})$ の質を有していると考えることができる。そうすればこれは *saeprefactiva* の一部に属するということになる。

しかし同一の不定動詞と雖も、様々な意義をもっており、その質もまた一様ではない。

たとえば (1) Ребёнок ходит в саду. 「子供が庭を歩きまわっている」のような場合には、*ходить* の意義は Σ_2 の中にある。しかしたとえば (2) Мальчик ходит в школу. 「子供が学校に通っている」のような場合には、 Σ_2 の程度がいくらか高い (Δt が大である) といえるであろう。

これに対して (3) Ребёнок уже ходит. 「子供はもう歩ける」のように能力をあらわすようになれば、これは全く Σ_0 の質をもっていると考えることができる。

したがって不定動詞は少なくとも Σ_0 あるいは Σ_2 の何れかの質をもつといえることができる。

§10 たとえば (4) Эта дорога ведет к реке. 「この道は川へ通じている」にみられるような、転義として用いられる定動詞 *вести* は、一見状態をあらわすものであるかにも思われるが、ロシア語の言語意識としては、過程としてこれをとらえていると推察される。

これは *вести* のかわりに不定動詞 *водить* をもってこれに代えることができないということばかりではない。たとえば (5) Он ходит в очках. 「彼を眼鏡をかけている」 (6) Она носит модное платье. 「彼女は流行の服を着ている」のように同じく転義として用いられる不定動詞と比較すれば、その心の持ち方の相違が、自づから明らかになるように思われるのである。

定動詞と不定動詞の区別を有する上述のような運動の動詞に対して、この区別を識らない他の動詞の場合には、一般に過程の質を有するとされるものでも、不定動詞と同じ質をとることがある。たとえば

(7) Он по-французски совершенно

Мог изъясниться и писал;

Легко мазурку танцевал

И кланялся не принужденно.

—Пушкин—

「彼はフランス語で完全に、
思いを述べることができ、書くことができた。
軽やかにマズルカを踊り、
なめらかに身をかがめることができた」。

これらの *писал*、*танцевал*、*кланялся* は何れも能力をあらわしている典型的な例であると見做されている。

§11 さて以上のことから運動の動詞の意義について考えてみると、どうなるであろうか。不定動詞は定動詞よりも「行為の認定の時間」 Δt が大であることは、既に述べた通りである。しかしこれだけでは運動の動詞を Δt が大である爾余の動詞から区別する意義的特性も、あるいはまた不定動詞の意義的特性も、明らかにすることはできない。

§9 において引用した拙稿から明らかなように、不定動詞は、定動詞によってあらわされる、方向を異にする運動の組合せと考えることができる。そこでいまベクトル \mathbf{R}_{i+1} の起点がベクトル \mathbf{R}_i の終点となるようなベクトルの列 $\mathbf{S} = (\mathbf{R}_1, \mathbf{R}_2 \dots \mathbf{R}_n)$ を考え、この上を運動する対象のあらわす行為を、不定動詞のあらわす行為とすることにしよう。対象 X の軌跡を \mathbf{S}_x 、あるいは \mathbf{R}_x であらわすとすれば、不定動詞の意義はさしあたり次のようにあらわすことができる。

$$V(\text{itr. mov. indet.}) : [d\mathbf{S}_x, \mathbf{S}_x \cdot K]$$

これに対して例えば водить のような他動詞の意義は、当然次のようになるであろう。

$$V(\text{tr. mov. indet.}) : [d\mathbf{S}_x, d\mathbf{S}_y, \mathbf{S}_y \cdot K]$$

この場合、 $\mathbf{S}_x = (\mathbf{R}_{1x}, \mathbf{R}_{2x})$ でかつ $\mathbf{R}_{1x} = -\mathbf{R}_{2x}$ ということもありうる。この場合当然 $\mathbf{R}_{1x} + \mathbf{R}_{2x} = 0$ である。このようなものとしては、たとえば

(8) Он ездил в Москву.

「彼はモスクワへ行って来た(今ここにいる)。」

のような用例が挙げられる。

あるいはまた $\mathbf{S}_x = (\mathbf{R}_{1x}, \mathbf{R}_{2x} \dots \mathbf{R}_{nx})$ であつて、 $\mathbf{R}_{2ix} = -\mathbf{R}_{(2i+1)x}$ であるようなものも考えられる。例 (2) にあげた Мальчик ходит в школу. 「子供が学校に通っている」における ходить はこのタイプに属するといえよう。

これに対して例 (4) に挙げた Ребёнок уже ходит. 「子供はもう歩ける」のような場合はどう解釈すべきか、未だよくわからない。現在のところでは $\mathbf{S}_x = (\mathbf{R}_{1x}, \mathbf{R}_{2x} \dots \mathbf{R}_{nx})$ の $n \rightarrow \infty$ の場合ではないかと考えている。

不定動詞の意義を以上のようなものとするならば、定動詞め意義は、必然的に次のようなものとならざるを得ない。すなわち、

$$V(\text{itr. mov. det.}) : [d\mathbf{S}_x, \mathbf{R}_x \cdot K]$$

$$V(\text{tr. mov. det.}) : [d\mathbf{S}_x, d\mathbf{S}_y, \mathbf{R}_y \cdot K]$$

これが過程の質をもっていることは、明らかである。

§12 動詞のアスペクトは、特にスラヴ語において著しい現象であつて、これについて数多くの研究や提言がこれまでなされて来たのは、既に周知のことである。それにも拘わ

らず、その本質については、未だ充分なる説得性をもち、かつは網羅的でもある説明を得ることができぬままにこれ迄推移して来たこともまた、よく知られた事実であろう。現在に至るもまだ陸続として刊行される体の研究が、何よりもこのことを雄弁に物語っている。

私見の限りでは、体の範疇に絶えずつき纏って離れることのない、この曖昧さの由って来る所以は、就中この範疇そのものの有する重層的性格に求めねばなるまいと、思われる。

即ちこの範疇は単一のレベルの上に成立する単層的なものではなく、語構成論、語彙論、形態論、統辞論のみならず、文体論、意味論などのレベルにまたがるものであって、相互に滲透し影響し合いつつ、一つの立体的な体系及至構造をもつに至っていると、考えられるのである。

このように複合的かつ重層的な構造をもつと推定される、いわば「したたか」な範疇に対しては、これに相応したアプローチの仕方がなくては叶うまい。その為には、たとえ構成的に過ぎるという誹りを受けようとも、やはり各々のレベルにおけるこの範疇のかかわりを一つ一つ解明して行くことが何よりも先決であると思料せられるのである。

ここで問題にしようとしているのは、これまで考察して来た行為の質と体との関係である。これを問題にしようとするのも、偏えに上述のような趣旨の然らしむる所に従ったまでのことであって、決してこれを以て体の範疇そのものについて、一定の結論めいたものを主張するつもりは些もない。特に断っておきたいことである。

§13 そこで行為の質と極めて密接に関連しているとみられる、接頭辞の附加について考えてみることにしたい。これは周知のように、不完了体動詞から完了体動詞を作る手続きとして最も典型的なものであるが、この手続きがなぜ完了化の機能を有するかについての議論は、体の本質との関連においてなされるのが至当であると考えられるので、ここでは暫く措くことにする。

ところで語彙のレベルにおいては、行為の認定の時間が比較的小であるときには、この行為は「完了体」のアスペクトと結びつく傾向があると仮定してもよいと思われる。

このような仮説からすれば、事件の質をもつ動詞は、本来的に「完了体的」な意義を有すると見做されるから、この場合には接頭辞による完了化の問題は、さほど重要なものではないと言い得る。派生の原基たる、接頭辞を伴わない非前綴動詞の意義が、既にして完了体的だからである。

ただここで特に指摘しておかねばならないと思われるのは、いわゆる完了体単純動詞に関して初等文法に往々にみられるところの記述についてである。これは単純動詞であって完了体動詞であるのが、*дать*「与える」と *купить*「買う」に限られている、とするものである。

単純動詞 *verba simplicia* なる用語を以て何を指すかの論議はしばらく措くとして、仮にこれを非前綴動詞と同義であると解しても、このような記述は必しも正しいものとは言えない。実際には非前綴完了体動詞の意外に多く存在していることが、知られているか

らである。

たとえば *leikw-ī- > лишить 「残す」 (cf. gr. λείπω, lat. (re-)linquo etc.) は非前綴完了体動詞である。これに対応する不完了体動詞 лишать は лишить に多回体接尾辞 -a- (*-ā-, cf. lat. habēre : habitāre etc.) を附加することによって派生した、二次派生の動詞である。

この種の動詞に属するものを若干挙げるとすれば、たとえば пустить-пускать 「放す」、решить-решать 「決める」、ступить-ступать 「歩む、踏む」、явить-являть 「示す、あらわす」、бросить-бросать 「投げる」、кончить-кончать 「終える」、хватить-хватать 「つかむ」、сесть-садиться 「坐る」、стать-стоять 「立つ」 等々がある。

§14 また動詞によっては、同一の動詞が完了体と不完了体の両様の体をもって用いられることがある。ロシア文法で謂う двувидовые глаголы である。これに対応する定訳は未だないように思われるので、これを仮に「両体動詞」verba biaspectualia と称することにしよう。

この種の動詞もまた、完了体の意義をもって使用される場合に限定すれば、非前綴完了体動詞と見做すことができる。これらの動詞は「事件」だけでなく、「過程」の質をもつこともある。たとえば арестовать 「逮捕する」、велеть 「命ずる」、женить 「結婚させる」、использовать 「利用する」、казнить 「処罰する」、образовать 「形成する」、организовать 「組織する」、телеграфировать 「電報を打つ」 などである。

この種の両体動詞は、外来語あるいは名詞を派生原基とする、いわゆる denominativa を基盤として、近來頃にその範囲を拡大しつつあるように見受けられる。

たとえば上に列挙したものの中にも既にみられるように、-ировать の形をもつ動詞群がこれである。これはラテン系の動詞不定法語尾 -ir がドイツ語に借用せられ、ドイツ語の不定法語尾 -en が附加されて -ieren となったものを、ロシア語が借用するに及んで更にこれを -овать で延長した形である。

この形を有する非前綴動詞の中には専ら不完了体としてのみ使用されるものも、その数において決して少くはないが、圧倒的な部分は両体動詞である。たとえば абстрагировать 「抽象する」、экстрагировать 「抽出する」、пародировать 「パロディー化する」、формализировать 「形式化する」 анализировать 「分析する」 などの類である。

§15 「過程」の質を有する動詞に接頭辞が附加されれば、この動詞は原則として完了体動詞に転化する。周知のようにこれは接頭辞による完了化の手続きが、最も典型的な形で適用される場合である。これにもさまざまな種類があるが、ここでは細部には立入ることをしない。若干触れて置く必要があると思われるのは、運動の動詞に関してである。

定動詞の場合には、既に述べた説明から明らかなように過程の質を有するから、上述の

原則の例外を構成しない。たとえば лететь (不完)「飛ぶ」－ улететь (完)「飛び去る」、итти (不完)「行く」－ прийти (完)「来る」の如くである。

これに対して不定動詞の場合には、若干事情が異なる。これは既に述べた規定によれば、本来、 $\Sigma_2 (= \{\Pi_i | i \in N\})$ に属するはずのものである。しかるに Σ_2 に属する爾余の動詞とは異り、不定動詞に接頭辞を附加することによって、完了体動詞に転化するものも存在するのである。

たとえば проводить「見送る」、заходить「歩きはじめる」、наплавать「ある距離を航海する」、сносить「持って行って来る、運びあつめる」、отлетать「飛び終る、ある期間飛行士として過す」、перевозить「次々と輸送する」などは何れも完了体動詞であり、しかもこの類に属する動詞は予想するよりもはるかに多いということが出来る。初級文法が教えるように、「不定動詞に接頭辞を附加すれば不完了体動詞が得られる」とは、必ずしも単純には言えないのである。

これに対して接頭辞を附加しても不完了体動詞としてとどまるものは、上に挙げた例とは同音異義語を構成する。たとえば, проводить「導く、遂行する」、заходить「立寄る」、сносить「持去る、折り去る」、отлетать「飛去る、飛立つ」、перевозить「移送する、渡す」などは、何れも不完了体動詞であって、定動詞に同一の接頭辞を附加することによって成る対応の完了体動詞と対偶を成している。

両者の意義を比較すれば、一般に前者が時間的及至空間的限定を伴う意義を有するに対し、後者の場合には行為の様態、あるいは行為の空間的位置をあらわすことが多いといえる。

§16 これに対して бегать, ползать、を原基とするものは、接頭辞を附加した場合、原則として完了体動詞に転化する。たとえば забегать「あちこち走り回りはじめる」、набегать「走って足跡を残す」、пробегать「走りまわって過す」あるいは、заползать「這いはじめる」、сползать「這って行って来る」、проползать「ある時間這いまわって過す」などである。

これに対して接頭辞を附加しても、完了体動詞に転化しない場合には、アクセントを原基と異にしている。たとえば、

забегать「かけ込む、一寸立寄る」、набегать「突当る」、пробегать「走り過ぎる、走り通す」あるいは заползать「這込む、もぐり込む」、сползать「這い下りる」、проползать「這って通る」などである。後者の場合何れもたとえば набежать、сползти 等の完了体動詞と体の対偶をなすが、前者と後者の意義については、先述の場合と全く同様である。

これらの -бегать、-ползать などの形は、アクセントの位置から見て、明らかに多回体接尾辞 -а- による二次派生の動詞であると考えられる。

これは ездить を原基とする動詞の場合に更に明確な形をとる。たとえば заездить

「乗疲らす」、*доездить*「残りの時間に乗って費す、乗疲らす」、*переездить*「乗回る」、*проездить*「調教する、ある時間旅行に費す」、*уездить*「乗歩いて均らす、乗馴らす」などは、すべて完了体動詞である。これに対して不完了体動詞は、*ездить* から多回体接尾辞によって派生した *-езжать* を原基として用いる。たとえば *заезжать-заехать*「乗って入る」、*доезжать-доехать*「～まで乗って行く」、*переезжать-переехать*「渡る」、*проезжать-проехать*「通過する、乗り越える」、*уезжать-уехать*「出発する、去る」などがこれである。この場合にも上述の意味の対立は明らかである。

§17 以上述べ来たったことから、運動の動詞に属する不定動詞には、実は二つの種類が存在していることが明らかになったと思われる。*-бегать/-бегать*、あるいは *-ездить/-езжать* の対立によってあらわされるものおよびこれと平行する *водить₁/водить₂* のたぐいである。

この場合両者の間には意義的な対立が存在していることもまた明白である。しかし上で考察した意義の対立は主として接頭辞の意義における対立であった。問題とすべきはむしろ同一の接頭辞が附加されながら、その接頭辞に一定の意義的相違を生ぜしめる所以のものは何か、ということであろう。これはその語基の部分に存するに違いない。

そこでこれらの動詞の意義を再び検討してみれば、次のように言うことができると思われる。すなわち *-ползать*、*-бегать*、*-ездить* の系列は、明らかに未だ不定動詞の特徴をなす条件、 S_x あるいは S_y を保存しているとみられるのである。たとえば *набегать*「走って足跡を残す」-*набегать*「突当る」、*пробегать*「走りまわって過す」-*пробегать*「走り通す」、*сползать*「這って行って来る」-*сползать*「這って下りる」、*проездить*「調教する、ある時間旅行に費す」-*проезжать*「乗り越える」にみられる通りである。

語基の区別をしない不定動詞の場合にも同様のことが言える。たとえば *заходить*「歩きはじめる」-「立寄る」、*сносить*「持って行って来る」-「持去る、折去る」、*отлететь*「飛び終る、ある期間飛行士として過す」-「飛去る、飛立つ」、*перевозить*「次々と輸送する」-「移送する」などである。

§18 このように不定動詞であってかつ完了体である前綴動詞を、仮に「完了体不定動詞」*verba perfectiva indeterminata* と称することにする。これに対し、接頭辞を伴っても不完了体にとどまっている不定動詞は、すでに不定動詞の意義的特徴を喪失していると言うことができる。すなわちこれらの動詞の場合、「相異なるベクトル」の上を対象が運動するという、運動の方向性が中和されてしまっていると考えられるのである。*-бегать*、*-ползть*、*-езжать* のように多回体接尾辞による派生が可能であったのは、偏にこのような事情の然らしむところであったと考えることができる。

これに対して完了体不定動詞の場合はどうか。この種の動詞が接頭辞を伴って完了体動詞に転化するとすれば、これらの動詞のあらわす行為の質は「状態」ではあり得

ない。後に述べるように「状態」の質をもつものは、接頭辞を附加しても完了体動詞になりにくいからである。してみればこれは少くとも「過程」の質を有するとみななければならぬまい。一方意義の面からすれば、この種の動詞は接頭辞をとり、完了体動詞に転化してもなおかつ不定動詞の意義を保持し続けている。ここから導かれる結論はただ一つ、この種の動詞においては、そのあらわす行為を全体として「一個の過程」として観じているということである。これはこの動詞の意義が個々の行為及至過程の単なる反復でなく、方向性という質の異なる行為及至過程から構成されているという、不定動詞の意義の特殊性に由来するものに違いない。

しかし一方ではこの種の動詞は接頭辞を附加することによって容易に方向性という条件を喪失し、 Σ_2 の質をもつものに転化するのである。したがって一般に不定動詞の有する意義は、過程の質をもちながらも、 Σ_2 の質に比較的近いものであったと考えることができる。他方この種の動詞は § 9 および § 10 で考察したように、非前綴動詞の場合に Σ_0 の質をとることもあった。ここからこの種の動詞の意義は Σ_0 の意義とも近縁であるといえることができる。このように非前綴動詞の場合、 Π の質が Σ_0 に転化するとすれば、この種の動詞は接頭辞附加という手続きを経なくとも、方向性という条件を中和及至喪失することが、比較的容易であったとみななくてはならぬまい。

§19 これに対して定動詞に接頭辞が附加される場合には、条件 **R** の存在が、この前綴動詞の意義の全体と矛盾を来すことはない。たとえば **прийти** 「来る」、**уехать** 「乗去る」、の如くである。したがってこの場合、条件 **R** はいわば当然のこととして、irrelevant なものとなるに違いない。これが一般に「定動詞に接頭辞を附加すれば、この動詞は単なる完了体動詞となり、定動詞の性質を失う」とする言い方を可能ならしめる根拠となっていると考えられる。

しかしたとえば **переводить** (完) 「次々と輸送する」、**сносить** (完) 「持って行って来る」に対する **перевести** (完) 「移送する」、**снести** (完) 「持去る、下ろす」を対比すれば明らかなように、**вести**、**нести** などの定体動詞を基幹とするものは、接頭辞の有する可能な意義のうちから、条件 **R** に抵触しないもののみを選択しており、この意味で条件 **R** は未だ「隠された形」で機能していることが知られるのである。したがってこの種の動詞は本質的には完了体動詞 *verba perfectiva determinata* であって、上述の完了体動詞と対立していると考えられる。

§20 Σ_0 の質を有する動詞の場合、絶対的定常性をもつものは、原則として不完了体動詞であって、対応の完了体動詞を有しない。たとえば **сидѣти** 「坐っている」、**стоѣти** 「立っている」等である。

しかしこれらの動詞も屢々接頭辞を伴って完了体動詞に転化する。**сидеть** を基幹とするものを例にとれば、たとえば **высидеть** 「坐り通す」、**досидеть** 「～まで坐り通す」、

засидеть「糞便で汚す」、насидеть「卵を抱く」、обсидеть「椅子などを使ってすわりよくする」、отсидеть「坐り通す、しびれさせる」、пересидеть「長く坐り込みすぎる」、просидеть「坐り通す」、усидеть「居坐る」などである。これらの動詞の対偶をなす不完了体動詞は、いずれも多回体動詞 *сидивать* を基幹として派生される。

これらの動詞の意義を観察すれば、ここには一定の条件が存在していることに気づくであろう。すなわちこれらの絶対的定常性を有する状態動詞に接頭辞が附加せられて、完了体動詞に転化するためには、接頭辞が時間的意義を有していなければならないということである。たとえば *стоять* の場合、時間的意義を有する接頭辞は、原則として完了体動詞を派生する。*выстоять*「ある時間立ち通す」、*достоять*「～まで立ち通す」、*настоять*「主張しつづける＝固守する」、*отстоять*「主張する、守り通す、終りまで立っている」、*постоять*「しばらく立っている」、*перестоять*「長く立っていすぎる」、*простоять*「立ち通す」、*устоять*「持ちこたえる、固守する」などである。これらの動詞の対偶をなす不完了体動詞は、いずれも多回体動詞 *-стаивать* を派生基幹としている。

これに対して空間的意義をもつ接頭辞、あるいは行為の様態をあらわす接頭辞は、この種の動詞を完了化しない。たとえば *обстоять*「～の状態にある < *まわりに立っている」、*предстоять*「前に立っている、近くにある、切迫している」、*противостоять*「向って立っている、逆らう、対立する」、*отстоять*「ある距離にある、へだたっている」などは、何れも単体の不完了体動詞 *imperfectiva tantum* であって、対応の完了体動詞を持たない。このことからこの種の動詞が接頭辞の附加によって完了化するか否かは、専ら接頭辞自身の意義によるのであって、運動の動詞におけるが如く、派生の基幹となる動詞の意義によって規定されるのではないことが、結論される。

§21 相対的定常性を有する状態動詞は、何れも接頭辞の附加によって完了化するのを原則とする。たとえば *ввертеть*「ねじ入れる」、*вывертеть*「逆にまわして抜く」、*довертеть*「すっかりまわす」、*завертеть*「ねじって締める」、*перевертеть*「ねじ曲げる、ねじ直す」、*взволновать*「波立たせる、動揺させる」、*переволновать*「ひどく動揺させる、多数を不安にさせる」、*разволновать*「大波を立たせる」などである。

この場合には例から明らかなように、接頭辞の意義による類別には関わりなく、完了化が行われている。

したがってこの種の動詞は非前綴の場合、 Σ_0 の質を有していても、より過程の質に近いといえることができるが、このことは我々の言語的直観ともよく符合している。

§22 これまで述べてきたことからすれば、行為の認定の時間だけを規準とした場合、行為の質は次のような系列を作るであろう。

$$E < \Pi < \Sigma_0, \Sigma_1 < \Sigma_2 < \Sigma_3$$

また明らかに $E < \Sigma_1$ 、 $\Pi < \Sigma_2$ 、 $\Sigma_0 < \Sigma_3$ も成立する。しかし Σ_0 と Σ_1 および Σ_2 、

あるいは Π と Σ_1 は必しも比較可能ではない。

§23 次に、 E と Π と Σ_0 とは行為の質として一つの連続体を構成するが、これらの各々から生成された Σ_1 、 Σ_2 、 Σ_3 のあいだには、相互に移行し合う条件はなく、必しも連続的であるとは言えない。

以上の考慮から「質」相互の関係としては、図4に示すようなものが考えられる。

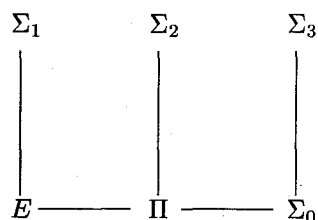


図4

ところで、 Π の質をもつもののうち、運動の動詞に属するものは、不定動詞の場合は Σ_0 に近く、また定動詞は E に近い質をもっていた。更に接頭辞が附加された場合、不定動詞は方向の条件を失って Σ_2 に転化するものと、これを保存して Π の質を維持する「完了体不定動詞」とに分化することが観察された。

一方 Σ_0 の質を有するもののうち、相対的定常性を示すものは、 Π に近い質をもち、接頭辞の附加によって完了化されるのに対して、絶対的定常性を有する動詞は、特定の意義を有する接頭辞が附加される場合にのみ、完了化することが判明した。

また語構成の手続きからすれば、 Σ_1 、 Σ_2 、 Σ_3 は、*водить* などの若干の例外を除いて多回体接尾辞によって原基動詞から派生されている。

以上の三点を考えれば、図4は次のように具体化することができる。

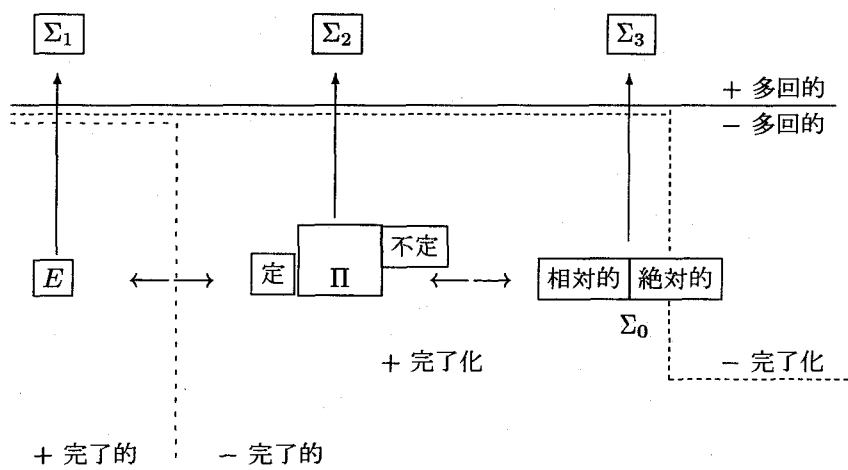


図5

以上が現在までのところの、動詞の質に関する一応の結論である。

1979. 4. 30.